



裁判所書記官が走る (1)

(裁判所勤務の回顧録)

広島文化学園大学看護学部

榎 久仁裕

■ はじめに

本稿は、裁判所事務官そして裁判所書記官として裁判所に16年間、勤務した私の経験談であるとともに私の個人的な年表でもある。余談もあり個人的な感想そして理不尽な正義感から論述する場面もあることを了解していただきたい。16年間の裁判所勤務は、私にとって走ってきた人生のような気持ちがする。日々、事件処理に追われ、これでいいのかと、自問自答いや煩悶しながらの勤務であった。ある宗教団体の事件、そして大量難民の不法上陸の事件、死刑を言い渡された殺人事件、少年がバスジャックした事件など色々な体験をさせてもらった。そして内部的には多くの裁判官や同僚とも接してきた。助けてもらった人あり突然の足引っ張りをされたこともあった。法を執行する裁判所書記官としても、ついつい人情的になってしまう自分があったことを今、回顧している。国民または市民の方々にとって、裁判所は、敷居が高くそして堅い職場というイメージがあるのは確かであると思うが、そこには何処の職場にもある人間模様がある。職員同士の諍いや噂そして考え方のぶつかり合いなどはよくある話である。例えば職員同士の離婚や親族間の争いなどもあるようである。しかし私は裁判所勤務の16年間は、喜怒哀楽とともに良い経験をさせていただいた職場であったと思っている。

■ 裁判所採用決定と妻との結婚

私は中央大学法学部法律学科在学中から交際していた女性がいた。今の妻である。大学2年の夏前から交際していた。当時は司法試験なんぞを目指して法律の勉強をしていた。妻は私の隣りの下宿部屋の東京大学工学部の大学院の先輩からの紹介であった。最初は何とも思わなかったが次第に仲の良い友達関係になった。彼女の両親は共に教師であり、彼女は教育一家として育ったようである。私とは正反対の環境である。私の両親は私が中学そして高校在学中と言えども、自分の家に人を招いては酒を飲んで大騒ぎすることが好きな人間であった。ましてや私には自分の部屋などはないのであり、試験勉強している私の机の横では酒を飲んで人、歌を歌っている人がいるのである。そして挙げ句の果てには、勉強している私に人生は勉強だけではないという輩も出てくる始末である。今、思えば私の集中力はここで養われたと言っても過言ではない。今となってはある意味、感謝である。祭りが終われば打ち上げの宴会、私が大学に合格すれば宴会、裁判所に採用されれば宴会、私に関することだけでも、自宅では宴会続きである。私の父は長年、地元の祭りを指導していた関係で、秋の祭りといえ前後1ヶ月は毎日のように人が来て祭り談義である。現在、母は他界したが今、思えば父と母は祭りで結ばれたようなもので、長男である私の勉強よりもこの宴会が大切だったのかもしれない。いや私の両親は私に勉強という「足かせ」を付けないということが信条であったのかもしれない。私の小学校からの無鉄砲も、この両親だからこそ許してくれたと思うと何もかもが許せるような気がする。でも当時はもっと静かにし

えのき くひろ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

て欲しい、静かな環境で勉強がしたいという気持ちがあった。しかし私が裁判所を辞職すると言っても何の反対もせず自分のやりたい事をやらせてくれた両親には感謝している。でも思春期の私には時には宴会ばかりする両親を恥と感じたりすることもあった。しかし私の両親は私に勉強しろと言った事は一度もないのである。自分が親になって息子を持って、初めて驚く事実である。最近、父と同年配の男性と近くの病院で出会って一言「わしらあ、あんたの家で酒を飲んどっても、あんたは勉強しよったのお。」当時48歳にもなった私は妙に「むかついた。」。しかしこの人、今の私にとっては良い人であり懐かしい人でもある。亡くなった母を思い出すからである。裁判所採用決定を受けての帰り道、付いて来ていた妻に「結婚しようか。」と言った。妻は快諾してくれたものの妻の実家の両親の許可はもらっていないのである。遠い茨城県の3人姉妹の長女を、嫁にもらうということは大変であることが脳裏に浮かぶ。それとともに妻の実家は茨城県鹿島郡である。田舎の風習が残るところであり、村には信号機がほとんど設置されていないという所であった。「たばこ」と書いてある看板の店に行き、「マイルドセブンをください。」といったら、「ラークしかない。」と答える「たばこ屋」さんがあるのである。つまり「たばこ屋」と書いていても、種類のたばこしか売っていないのである。でもここには私が経験したこのない自然という素晴らしい環境があった。骨休みに私は妻の実家に行っていた。本当に心和むところである。ところで妻との結婚に関しては厳格な義父が正直、問題であった。義父は後に校長になった人である。祖父は教育長であったということである。これは司法試験より難題であった。ところが、この義父は「こんな娘でもいいですか。」という返事である。私は「知識人は違う」と感服した。私は現在でも、この義父とは良い関係にある。もちろん義母ともである。義父から法律相談を受けることもある。私は一生懸命に調べて回答するという気持ちになるのである。遠く離れている義理の両親であるが、何かあったら直ぐにかけつけようと思っている。妻の両親から結婚の承諾をもらって茨城から帰宅した時、テレビのニュースが流れていた。暑い夏の午後であった。日航機が墜落したということである。坂本九さんなどが亡くなられたということであった。私もその日に全日空機に乗っていたのである。圧力隔壁が問題であるとか、天候が問題であるとか、墜落の原因についての議論が交わされたが、当日、私が搭乗していた全日空機も大変、揺れたことは事実である。アナウンスが流れた。「当機は大変、揺れておりますが飛行には問題ありません。」ということである。今、考えてみれば「問題、あったんじゃない？」という思いである。しかし妻との結婚を許してもらった帰りの飛行機で死んだんじゃ、死んでも死にきれない話である。こうして私の結婚生活と裁判所生活が始まるのである。

■ タイピストの方々の偉大さと優しさ

私は裁判所事務官として裁判所事務局総務課文書係に配属された。そこは言わば裁判所の窓口である。日々、郵送されてくる司法行政文書を受付し各課の帳簿に記して担当の課に行って文書を渡し、受領印をもらう仕事である。言葉を換えて言えば裁判所の郵便配達人である。私は修行として3年間、この仕事をしたのである。ある口の悪い係長からは「もう少し綺麗な字をかけや。」と言われたことがあった。新米の事務官ながら「分かればいいんでしょ。」と口答えをする元気者でした。しかしこの文書配達先の係長はエリート係長であり現在、首席書記官や事務局長になっている人ばかりである。よくもまあ生意気なことを言ったものである。世間を知らない、裁判所の中の人事ポストをしらない、ということは恐ろしいことである。私には裁判所の中の役人の掟が分かっていないのであった。ところで総務課には女性タイピストが数人おられて裁判所の各部の判決書や司法行政文書などをタイプしていた。このタイピストの方々は私が所属する文書係に所属しかつ転勤がまったくないという方々だった。だから総務課長や課長補佐ましてや係長以上に裁判所の歴史や掟を知り尽くしている方々で、時として総務課長に対して「寝言は寝て言え！」なんぞ言っていたような記憶がある。その時の事情はあるのだが、その女性タイピストの方が正しかったと今でも思っている。つまり総務課長があまりにも保身をするような言動をしてしまったということである。裁判所の総務課長と言えば、通例の人事であれば次は中国地方にある本庁裁判所の事務局長か首席書記官である。上司であろうと「おかまいなし。」である。ある時、法廷での非常通報が鳴った時は、「15年ぶりに鳴ったは！」と言い放つ女性たちなのである。つまり転勤を繰り返

返してきた総務課長は事態を把握出来ずに、この女性たちに身を任せてしまうという奇妙な現象が現れるのである。そんな女性の方々だったが、今はタイピスト制度もなくほとんどの方々が退職された。しかし何故か私は可愛がられた。総務課長が「榎君ちょっと」と言って呼ばれても、必ず「何言われたん。どうしたん?」と優しく聞いてくれる女性たちであった。私にとっては大きな味方だった。懐かしい思い出ある総務課の女性の方々である。私の結婚式については綺麗な花かごを家まで送って下さった。この方々は私の裁判所の後見人という存在で、後になっても色々と声を掛けてくれたのである。

■ 裁判所長官の給与

ある月の給与支払いの日、私は秘書係の女性事務官の手伝いで長官の給与を会計課まで取りに行くことがあった。当時はまだ現金支払だった。偶然だったのですが私は長官の給与明細を見てしまった。私が驚いたのは長官の給与の額ではなく、所得税の額である。なんと私の給与全額より長官の所得税額の方が多いためである。新婚の妻に給与袋は渡したものの、ショックから立ち直るのに少し時間がかかりました。ましてや、この事実を妻には話せなかったのです。妻はご苦労様と言って受け取ってくれたのですが、複雑な思いであったことは確かです（1万円札は10枚はあったのですが????）。憲法で習ったことであり長官は天皇による認証官なのである。当たり前のことであると理解しなければならないのであるが、ショックとともに長官の偉大さに感服した事件であった。「人間の価値は給与の額で決まるものではない。」とやせ我慢したかもしれない。

■ 裁判所をやめたくて

郵便配達も3年してくると仕事がいやになってくる。なんで裁判所に入ったのに文書の受付ばかりしなければいけないのかという疑問が出てくるのである。「裁判所をやめようか。」という気持ちになるのである。辞職を考えた最初の時であった。この時は後でくる書記官としての刺激的というか激動的というかそんな職務を予想することができないのは当然である。司法行政文書を配るのに走るどころではない走りをしたのである。時には暴走したかなということもあった。

■ 一人っ子の長男誕生

私には妻との間に男の子がいる。浪人して、晴れて大学に入学したのである。小学校、中学校、高校そして浪人、最後には大学までしかも、同じ学部、同じ学科に入ったのである。まったく予想もつかない出来事であるが、どうも本人は勝ち誇った気持ちでいっぱいのである。理由は私には十分に分かるのである。小さい時から悪いことをしてはいけないと、説教され続けた人間と肩を並べたつもりなのである。こっちとしては「バーカ、まだまだ20年早いは!!!」と思っている。顔は妻にまったくそっくりである。しかし進んでいる道は私そっくりであることに「なんと調和がとれているものだ。」と心の中で納得してしまっている私がいることに、少し不満なのである。子供には子供の人生があると塾生の保護者によく言っている「私」の息子は、私達夫婦の半分半分の人生を送っているような気がするのである。私は息子に法律を勉強しろとか言ったことはない。しかし「かえるの子はかえる」かと再度、自分を納得させている。「ごめんなさいで済めば、警察も裁判所もいらんよ。だからそうならないように注意するんよ。」これが私の息子を説教する時の口癖である。もしかしたら、これが息子に法律を学ぶ気持ちにさせたかもしれない。読者の皆さんには子供には色々な言葉を選択して説教したらいいと勧めたい。自分の職業観まる出しで、しかもそれが毎回、同じ言葉が出てくるような説教をしていたら逆効果で私の息子みたいな現象が起こるみたいである。とは言え、同じ法律の世界と言ってもその中で、色々な道があるのだから、そこは息子に選択して頑張ってもらいたい。結局、一人息子が法律を勉強してくれることを、有り難く感謝しているのである。

■ 裁判所総務課長

総務課長というポストは長官のお膝元という意味で気持ち、または心の配慮などに気を使うポストである。次のポストは首席または局長なのであるから、失態は許されないのである。また職員間におけるセクハラ等の聴取窓口でもあるのでここにおいても配慮しなければならないポストである。局長は裁判官の中でも出世コースにある裁判官が就くポストであるとともに、次長は管内すなわち中国地方における事務官、書記官の最高ポストである。この次長は管内地裁または家裁の局長、首席が最後の出世ポストになる位置である。そんな言わば管内の大御所とともに長官がいるところの総務課長であるから長官、局長、次長には本当に気を使うポストである。局長や次長らのお呼びがあれば椅子にかけていたスーツを着て、直行していた。1日に何度となく続くお呼び出しに、何回もスーツの上着を着て直行していた姿が私の記憶に残っている。かといって総務課長は私にとって好印象の方ばかりであった。私が総務課にいる間に3人の課長が異動で来られたがすべて私にはいい人に感じられた。その内の一人の課長の時に私は妻と結婚したのであるが、私が課長に結婚の報告をした時も課長の方から「媒酌人はいるの。」と心配をしてくれた。私は主賓として挨拶をお願いした。総じて言えば私など気を使うポストに就くことは性格上、難しいのであり、本当に尊敬に値する方々ばかりだと思う。もしかしたら私なんか辞職覚悟で大きな態度をしていると思っていた。その前に総務課長のポストまでたどりつけるのかという問題もあるが……。

■ 長官主催のビールパーティー

当時、裁判所では夏到来前に長官主催のビールパーティーというものがあった。これは勤務そのものではなかったが、長官主催ということで総務課の職員はその開催を手伝った。私の記憶ではあるが、強制された残業ではなく、職員の自発的な意思によってお世話していたようであった（とは言え、現在ではできない行事であろう。）。もちろん当時の私は認証官である長官に興味津々であり、「手伝おうかな。」という気持ちで手伝った。裁判所長官そして所長など裁判官の中でも偉い方と接する機会はそんなにないのであり、私は動物園にでも行く気持ちで手伝った。裁判官を動物園の動物と同視しているわけではないが、私にとっては幼い頃、初めて動物園で動物を見た時の感覚に襲われたのである。つまり日頃、言い換えれば日常、見ることができない光景なのである。裁判所の頭脳というべき人達を一度に見ることができるのである。その時、後に最高裁の判事になられた長官が意外にもぺいぺいの私に話しかけてくれたことに大変、感激した。「裁判所はどうですか。」私は思わず「頑張っています。」と答えた。問いに対する答えになっていないのである。慌てていた自分がそこにあった。出席していた裁判官にお酌して回った。少し調子に乗りすぎたかもしれない。後日、課長補佐から「榎君は、この間、スカートををはけば良かったね。」とからかわれた。この長官は大の阪神タイガースファンで職員のソフトボール大会にタイガースのユニホームをわざわざ着て参加されたことを今でも覚えている。しかし職員は参加するはずのない長官が参加するソフトボール大会に少し緊張していたような気がする。私達職員はジャージ姿でプレイするのにタイガースのユニホームを一人、着ていた長官は非常に目立った。でも私はこの長官に今でも親しみを持っている。決して威圧的でなく人格も伴った庶民的長官だったという印象が残っている。最高裁判所の判事になられた後、今はもう亡くなられたということである。

■ 裁判所局長の指令

局長が新米の私に仕事を指示することはないのであるが、私の席の裏側にコピー機があった。突然、総務課の部屋に入ってきて「これ、コピー。」というのである。若かった私は、コピーぐらい自分ですればいいのと思う毎日であった。私は日々、局長のコピー係なのである。終いには、「この人、コピー機、使えないのかな。」と思うくらいである。局長が扱う文書だから秘扱いの文書が多いはずなのである。しかも2部必要な時でも「これ、コピー。」というだけなのである。1部コピーして渡したら「もう一部。」

というのである。「最初から言えよ。」と心の中で文句を言うのである。慣れてきて「何部、コピーですか。」と先に聞くことにした。局長との会話は「これ、コピー。」「はい。」だけであったような気がする。通常、裁判所では、裁判官であっても自分でコピーする。どうしてこの局長はコピーしないのかという疑問が私に湧いたのである。後で知ったことではあるが、信頼性がない理由が分かった。つまり噂であるが、この局長、大学を卒業して民間会社に就職してコピーばかりさせられていたのでコピーが嫌いになったということである。しかしおかしい理由である。今でも納得できない理由である。この局長は私がコピー嫌いになることはかまわないのかと思うのである。自分が嫌な経験をしたら他人にはさせないという私の主義・信条に反するものである。とにかく人間関係をうまく計るのであれば、いくら上司でも、「これ、コピー。」と体言止めをしてはいけないのである。それは軍隊の命令である。今、思うと面白い経験である。民間会社でいくらコピーさせられても、それが原因でコピーが嫌いになったという理由を作った人も大したものである。役所ではこんなことも噂になるのである。しかしこの噂は本人が言わなければ、出ない噂であるような気がする。

■ そして裁判所書記官への任命（総務課長の苦言）

裁判所書記官になるためには裁判所事務官を3年経験して年齢が25歳以上で、裁判所書記官試験を受けなければならない。総務課長から裁判所書記官の試験を受けてはどうかと言われ、「まだ受けたくありません。」と言い続けていた。その課長からある日、「書記官になったら給料があがるよ。受けて貰わなければ困る。」と苦言を言われた。私は苦言を言われたから受験を決意したのではない。給料が上がることを知ってしまったからなのである。早速、受験して裁判所書記官になった。しかも最初の赴任が地元の支部であったことは有り難かった。通勤は車で10分弱で済むのである。しかし今、辞職してみて考えるのであるが、「裁判所書記官」という資格は辞職してしまうと収入の種にまったくならないのである。困った資格ではあるが、裁判所での多くの思い出とともに若い私を多少なりとも大人にさせてくれた資格ではある。感謝……。

■ 地方裁判所支部への転勤

支部での仕事は大変ではあったが、多くの思い出が出来た。ここで知り合った執行官には公私にお世話になった。この執行官はボートを持っていて、よく裁判所の職員を連れて釣りに行ってくれた。当然、裁判官もいるのである。お互いの釣り糸が絡まったり、釣れた魚の始末などをしたり、本当に私たちに釣りを楽しませてくれたのである。この執行官のお世話で、釣り船をチャーターして釣りに行った時の話である。ある時、若い事務官の糸が、誰かの釣り糸と絡まったのである。執行官や釣り船の船長が皆に釣り糸を引き上げるように言ったので、それぞれが釣り糸を引き上げ始めた。すると反対側の釣り糸が原因であることが分かったのである。その釣り糸は船の底を通して反対側まで伸びていたのである。執行官が「言うたじゃろうが、釣り糸はよく見て、船の下にならないようにせえーと。」と怒ったのである。しかしおかしいのである。釣り糸はみんなあげたはずなのである。「誰なあまだ釣り糸をあげてないのが、おろうが。」またまた執行官は怒っている。つまりこの執行官は面倒見が良くみんなの釣り糸のお世話までしてくれるのである。その時である、若い事務官が小声で私に言うのである。「榎さん、裁判官がビールを飲まれて寝ています。」釣り糸をまだあげていない犯人が私には判明したのである。小声で私は執行官に「……裁判官の釣り糸だと思います。」と告げた。その裁判官は熟睡状態であった。この裁判官とは、その後の裁判所生活で多くのお世話をしていただいた。地裁本庁での刑事事件に関して特にお世話になった。私が好きであった裁判官の一人である。

■ 私が作成した被告人調書への弁護人の意義申立て

ある漁業調整規則違反の事件であった。被告人と弁護人の打ち合わせの悪さか、被告人の記憶力の乏

しさが原因なのか分からないが、被告人質問の時に、被告人が弁護人に対する答弁の中で自己に不利益な事を言ってしまった、通常、弁護人は被告人との再度の打ち合わせのため裁判官に時間をくださいと頼むのである。しかしその依頼がなく、それまでの被告人の法廷での供述をマイクで私は耳にしていたので、その不利益発言を全部、調書に記載してやったのである。すると後日、弁護人から調書に対する異議が申し立てられた。これは刑事訴訟法にも規定されている裁判官の面前における調書に対する異議申立権である。違法である認識を持って漁業をしたというのであるから、書記官の私としては調書に記載するのである。被告人との打ち合わせが不十分なことを調書異議にすり替える弁護人の辛さは理解できるのであるが、書記官の調書は裁判官の面前調書といい、信用力はどの調書すなわち検察官面前調書、警察署における調書よりも優れた証明力をもつのである。私はこの愚かな被告人そして弁護人を庇護するつもりはなかった。自己の良心に基づく調書なのであるから、調書異議の申立てをした弁護人は愚かである。それまで金に物を言わせてきた被告人の生い立ちはバカバカしくてたまらない。法廷に出廷する被告人は金のプレスレットそして高級腕時計、当然、高級スーツである。二十歳そこそこの被告人を見ていると、「こいつ将来、どんな人間になるのかな。」と思うくらいである。「法廷は決してお金では買えないよ！」と心の中でつぶやいた私がいた。世の中は金という人もいるが私は金では買えない大切なものがあると堅く信じている。

■ 地方裁判所本庁への配置換え

この時に一番、困ったのは私の補助として働いてくれる事務官である。ロッカーの整理が悪いと言って首席書記官に直訴的報告をしたのである。そのロッカーは当該事務官との私の共同使用のロッカーであった。裁判所においては、事務官は書記官の補助であり、上司、部下の関係にある。「ロッカーを整理しませんか。」という話もなくいきなりトップである首席書記官への報告である。首席書記官が私に言った「榎さん、人から言われないうに下さい。」まったく理不尽な出来事である。足を引っ張られたという感じである。その上、「榎さんの奥さんは特別、美人ではないよね。」と言い放つ人間である。それを言い放つお前の嫁さんは「いかほどの美人なのか！」と言いたいくらいである。数年、一緒に仕事をさせて頂いたが、まったく余談の許せない人間であった。こんなことを書くと訴訟を起こしそうなタイプである。しかしこの配置換えで私は刑事訟廷事務室というところでの勤務となり刑事訴訟法という法律に真っ向から取り組む姿勢を持てたのである。そして広島大学大学院博士後期課程での研究に役立ったのである。

■ 裁判所刑事訟廷事務室での出来事

庶務係長の逮捕という事件が発生した。強要未遂罪である。ここで私は自分が勤務する裁判所刑事訟廷事務室についての搜索差押令状を作成するはめに遭遇するのである。被疑者は逆探知で現行犯逮捕された刑事訟廷事務室の庶務係長である。私は落胆した。本当に落胆したのである。事務官から書記官に任官した同期の人間であり個人的にも仲がよかった人間だからである。当然、この係長の事件は報道されたが勾留質問の立ち会いからは私ははずされた。「人間には魔がさすことがある。」というがまったく残念な事件であった。警察署の警察官たちによる搜索差押えが裁判所の私の部屋すなわち裁判所刑事訟廷事務室でなされたのである。令状発付事務をしていた私はこの事件の搜索差押令状を作成しなければならない辛さを味わい、かつその搜索差押えを甘受しなければならない経験をした。全国の裁判所の令状担当書記官において自分の所属する部屋の搜索差押令状を作成した書記官はいるのであろうかと聞いてみたいくらいである。涙が出た。同僚の逮捕という事実とともに自尊心の破綻が私の心に起こった。しかし私は今でもこの逮捕され起訴された同僚の元書記官はいい人だったと思っている。人間というのは犯罪のスポットにはまってしまうと自分を失うものであると思っている。今となってはこの元同僚が元気にしているかなという思いである。もちろん犯した罪はいけないことではある。後に検察事務官から聞いた話ではあるが、当初は担当の警察官が疑われたらしい。その次に担当の検察事務官が疑われ

たらしい。そして逮捕してみれば裁判所の書記官だったということであった。共犯者の存在も疑われたということである。「じゃー私も疑われたのではないか！」なにせ同じ部屋の同年齢の裁判所書記官だから……。同僚のこの元書記官には元気でいて欲しいという思いである。

■ 令状そして起訴状受付と勾留質問担当書記官としての出来事

日々、令状は発付していた。平和そうな世の中でも、令状の種類を問わず発付していた。それも一桁ではない数の令状である。それとともに、検察庁からの起訴状も受け付けていた。形式審査と言いながら、書記官としては、ここでこの起訴状の精査していなければならない。誤りがあれば、付箋をつけて担当部にまわすのである。つまり私は、刑事の窓口にいたのである。だから色々と外部の方々の苦情も聞いた。警察官に対する苦情などが、一番、多かった。しかし裁判所は警察官を管理監督する機関ではない。それにもかかわらず、国民の方々の中には、裁判所に言えばなんとかなると堅く信じている人がいる。そっけなく、裁判所とは関係ありませんというのも、これまた国民に対して不親切な裁判所となる。結構、言葉を選んで、話を聞き、丁寧に説明したものだった。ここでの仕事の中では、被疑者が逮捕されてから2日から3日でやる勾留質問という仕事があった。ここで決定すれば、10日間の警察署または拘置所での身柄拘束がなされる。テレビのドラマなどで見る取り調べは、この10日を利用してなされるのである。所謂、捜査機関側の持ち時間と言ってもいいだろう。この10日は最大10日の延長が通常ではできる。もちろん、裁判官の許可がいるのだけれど……。 (許可されない場合もある。) ここでの仕事は、私にとっては、ドラマチックであった。覚せい剤取締法違反、傷害、窃盗はあたりまえ、殺人、強盗殺人などを犯した被疑者と直面して調書を作成するのである。

■ 上司の不仲

何処の組織でも、直属の上司とその上の上司の仲が悪かったら、部下は本当に気を遣う。民間であれば、どちらかが即、転職であろう。しかし公務員であるのか、裁判所だからなのか分からないが、不仲状態で大変であった。明らかに部下にも分かる喧嘩をするのである。私には夫婦喧嘩にも見えた。「いっそのこと、離婚したら……。」というのが、ほとんどの部下の見解であった。

■ 現 在

広島大学大学院の博士課程後期を満了し、取り敢えず法律学者の道を歩むことになった。最初の仕事は平成21年の夏の広島文化学園大学看護学部での憲法の非常勤講師である。その数ヶ月後、中央大学法学部の通信学部広島支部の講師の仕事が入ってきた。いよいよ学者デビューである。何の違和感もなく講義を始めることができた。そして平成22年4月から改めて広島文化学園大学看護各部の非常勤講師として憲法を教える立場になった。

■ おわりに

本稿は、私の自叙伝として書きかけのものである。ある意味、中間点のものである。しかし、このあたりで、活字にしていだければと思い投稿したものである。最後まで、お読みいただいた方には、感謝いたします。